ビブリア No. 13

発行 いわき市平上荒川字長尾30
福島工業高等専門学校
編集 図書委員会
昭和49年3月1日

一年生が読んだ本

国語科 池田 豊

まえがき――ねらい

中学校を，（しかもその第3学年では，受験勉強などでかなり忙しく過ごして来て）終え，これから5年間の学生々活で，大いに心のかてをむさぼり食い，また積みたくわえなくてはならない年ごろの人たちが，同時にまた，実力ある科学技術人となるための専門的教養をつけることを強く求められているという立場におかれて，およそ「書物」というものに対して，どんな関心を持っているのであろうか。

その実態の一端を明らかにし，それに少しばかり説明を加えて，高専生活の初年度にある人たちに，自覚と検討の資料を供したいこと。

それと同時に，ぎっしり組み込まれた「過密ダイヤ」の中のささやかなひとこまとして，国語教育――読書指導のための基礎の手がかりをつかみたい，と考えたこと。

以上が，以下の二回の調査の動機であり，また，この小文の目的でもある。

2．第一回の調査――夏休みの一般教養的読書

現代国語教科書の読書案内的教材に関連して，理科系の青春学生時代には，かえって，「一流の，長い文学の傑作や，歴史・社会に関する忘れがたいもの，特に自叙伝など」を読む必要を話したが，具体的な書目にはあまりふれず，諸文庫本の活用をすすめた。

その前提の下に，休み前に，予定の書名を届けさせ，休み後，9月初に，実際に読んだ（読み進んだ）書物を書き出させた。本人の氏名も明らかにさせた。対象は時間のつごう上，機械工学，電気工学，工業化学の三科となった。

以下の配列は，日本，外国の別，著者の死没，現存の大体の年代順とした。多方面にわたっている現存作家のものについては，私自身の素養の乏しさのため，不正確の点が多かろうと恐れているが。(数字)は，回数つまり，読んだ学生の人数を示す。

(1) 日本

・陽外（3）―高瀬舟，山椒太夫，キタセクスアリス
・漱石（15）―吾輩は猫である，坊ちゃん，三四郎，こころ，硝子戸の中
・藤村（6）―破戒，桜の実の熟する時，春
・武郎（4）――一房の葡萄，カインの末裔，小さな者へ
・啄木（•1）―啄木詩集　・久米正雄（1）―学生時代
・実篤（6）―友情・愛と死，馬鹿一　・龍之介（5）―河童，玄鶴山房，鼻，羅生門，トロッコ，
・花袋（1）―田舎教師　・賢治（2）―グスコーブドリの伝記，風の又三郎　・太宰治（5）―斜陽，人間失格，晩年，お伽草子　・康成（7）―伊豆の踊子，雪国，川のある下町の話，名人　・由紀夫（8）―仮面の告白，金閣寺，潮騒，ふしぎな彼，獣の戯れ

壺井栄（2）—二十四の瞳，柿の木のある家　・新田次郎—孤高の人　・有三—路傍の石　・直哉（10）—暗夜行路，和解，城の崎にて，雨蛙，朝顔，邦子，或る朝，十一月三日午後の事　・洋次郎（4）—若い人，石中先生行状記，光る海，青い山脈　・中也—中原中也詩集　・福翁自伝（3）　・江戸川乱歩集（2）
・矢田挿雲—青春太閤記　・英治—新書太閤記　・井上靖（4）—あすなろ物語，たそがれの詩集

・健三郎—死者の奢り　・開高健—裸の王様　・原康子—挽歌　・綾子—誰のために愛するか，ぜったい多数
・北杜夫（5）—ドクトルマンボウ航海記，青春記，ボウエンキョウ，船乗りクプクプの冒険，幽霊，・庄司薫（4）—白鳥の歌なんか聞こえない，赤頭巾ちゃん気をつけて，バクの飼主めざして　・星新——ボッコちゃん，気まぐれ指数　・遠藤周作—おバカさん，ぐうたら生活入門　・森村桂（6）—天国にいちばん近い島，チャンスがあれば，・畑正憲—われら動物みな兄弟，ムツゴロウの結婚記，ムツゴロウの動物巷談
・井上ひさし—青葉繁れる　・平井和正—狼の紋章
・宮島達夫—恋と少年　・立原正秋—冬の旅　・周五郎—赤ひげ診療譚　・さらば夏の日　・もうひとりのぼく　・少年死囚刑　・青春をいかに生きるか　・若き日の苦しみ　・日本沈没　・幸之助—若さに贈る。

・ジンギス汗伝　・豊臣秀吉　・世界の星根にいどんだ人々　・遺跡を掘りおこした人々　・竹内実—毛沢東の生涯

・よく読まれたものを拾い出すと，
・漱石—こころ（7）　・直哉—暗夜行路（6）
漱石—吾輩は猫である（4）　・森村桂—天国にいちばん近い島（4）

(2)　外国
・ブロンテ—嵐が丘　・ローレンス—愛の詩集　・ヘミングウェイ（9）—誰がために鐘は鳴る，老人と海，武器よさらば，日はまた昇る　・スタインベック—怒りの葡萄　・パールバック—大地　・マークトウェーン—トムソーヤの冒険，ハックルベリフィンの冒険
・ローリングス—子鹿物語　・ネスビット—若草の祈り　・ゲーテ—ゲーテ詩集，若きヴェルテルの悩み
・ヘッセ（6）—車輪の下，郷愁，知と愛　・ロマンロラン—ジャンクリストフ　・カフカ—変身　・ジィド—狭き門　・サンテクジュペリ—夜間飛行　・ブランソワボワイエ—禁じられた遊び　・トルストイ—アンナカレニナ，復活　・チェホフ—決闘，短編集　・ツルゲネフ—初恋　・ドストエフスキー—罪と罰　・ハンターディベス—革命家　・三国志演義　・紅楼夢　・西遊記

・コナンとどくろの都　・バスカヴィル家の人々　・シャーロックホームズ物　・ルパンの告白　・黄色い部屋の謎　・怪盗ジバコ　・銀河のはこの惑星　・恐怖の疫病宇宙船　・デューン砂の惑星　・火星シリーズ　・007カジノロワイヤル　・太陽(リュイテン)
・タイムマシン　・スペイン岬の謎　・銀河パトロール　・太陽強奪　・人間豹　・73光年の訪問者　・ナタリーの朝
(3)　まとめ
・先に述べたような条件で選ばせ，読ませた結果として見るとき，いささかの意外の感を持たせられる。
①目につくこととしては，現存作家のもの，それも，「おもしろおかしいもの」（amusing）がぐっと多いのと，ＳＦものが好まれていること
②その間にあっても，まともな文学の読書の芽は，ささやかにあることが認められるが
③一方では，程度や順序から見て，まだむりではないかと首をかしげさせるものがあること
④ともあれ，素朴な段階にある学生としての，関心の層序や分布は見て取ることができそうである
⑤別の言い方をすれば，今回の事前予告と事後調査との趣旨が，学生に不徹底であった，むしろあるいは，「人生に感動する心」を養い育てるための読書の役目がまだよく理解されず，それとともに，そういう本の選び方に対しての情報が不足であると判断され
⑥すべての高専一年生の教養的読書は，まずこの本から，こういう順序で，という画一的なものは，もちろん，あるはずはなくとも，基礎的，最大公約数的な読書の手びきというものは，低い学年から，計画的，継続的に行なわなくてはならない，と，感じさせられた。

3．第二回の調査——冬休の読書
予告なしで，休みが終わってから，各自の読書の跡を，氏名を付記して，書き出させた。学習参考書と専門研究書とを除き，単行本としてまとまっているものに限った。全学年，四学科にわたった。
制限を前回よりも少なくしたので，届け出された範囲が広くなり，正確度も落ちたかも知れず，また，まとめるのにも不手きわとなった。

(1)　日本
①　文学・評論・随筆
・諭吉—学問のすすめ　・鷗外（2）—阿部一族，高瀬舟　・漱石（12）—吾輩は猫である，坊ちゃん，三四郎，門，こころ　・藤村—藤村詩集，破戒　・一葉—にごりえ　・武郎—生まれ出づる悩み　・啄木—石川啄木全集　・八雲（3）—うくろ首，雪女，怪談

・賢治—銀河鉄道の夜　・龍之介（4）—トロッコ，一塊の土，お富の貞操，羅生門，地獄変，鼻，奉教人の死　・徳永直—太陽のない街　・多喜二—党生活者　蟹工船　・鱗三—美しい女，私の聖書物語　・康成（7）—伊豆の踊子，舞姫，温泉宿，花のワルツ，十六才の日記，十七才，雪国　・実篤（4）—友情，愛と死，真理先生　・由紀夫—仮面の告白，青の時代　・大岡昇平—野火　・新田次郎—孤高の人　・洋次郎（7）—青い山脈，山のかなたへ，あいつと私，白い橋，石中先生行状記，光る海　・壺井栄—二十四の瞳　・坂口吾—安吾捕物帖　・石川達三—どろにまみれて　・松本清張—高校生殺人事件　・白川渥—風来先生　・伊藤整—火の鳥，氾濫　・庄野潤三—結婚　・健三郎—見る前にとべ，空の怪物アグィー，われらの時代　・杜夫（5）—夜と霧の隅で，舟乗りクブクブの冒険，どくとるマンボウ航海記，どくとるマンボウ昆虫記，どくとるマンボウ小辞典　・遠藤周作（17）—恋愛学入門，古今百馬鹿，現代の怪人物，月光のドミナ，大変だァ，留学，白い人黄色い人，孤狸庵閑話，ぐうたら生活入門，ぐうたら人間学，火山，死海のほとり，イエスの生涯　・星新一（11）—きまぐれロボット，ボッコちゃん，ちぐはぐな部品，盗賊会社，かぼちゃの馬車，きまぐれ星のメモ，おみそれ社会，なりそこない王子　・慎太郎（5）—化石の森，青年の樹，青春とはなんだ，挑戦，完全なる遊戯　・五味川純平—歴史の実験　・山崎豊子—白い巨塔　・庄司薫（4）—白鳥の歌なんか聞こえない，赤頭巾ちゃん気をつけて，さよなら怪傑黒頭巾　・五木寛之—青春の門，白夜物語，恋歌　・井上ひさし（2）—モッキンポット士の後始末　・神田理沙—十七才の遺書　・河野多恵子—男友達　・落合恵子—45パーセントのしあわせ　・高野悦子—二十才の原点　・吉田とし—人を愛するとき，・北山修（3）—戦争を知らない子供達，さすらいの子守唄　・石川章——たとえぼくに明日はなくとも，・河盛好蔵—人とつきあう法　・加藤諦三（5）—青春ノート，高校生の記，もう生きなおそう　・小林秀雄—ゴッホの手紙　・池田潔—自由と規律　・会田雄次—日本人の意識構造　・湯川秀樹—創造の世界　・相沢忠洋—岩宿の発見　・畑正憲—海から来たチブス　・佐賀潜—総理大臣秘書　・平井和正—死霊狩り　・鳴山草平—きんぴら先生青春記　・若山三郎—おじょうさんは婚約中　・南条範夫—仮面の人　・久我利男——日一日の人生論　・小川未明—世界童話集　・佐藤和正—軍艦物語　・聖書協会—聖書　・狼の紋章　・十二月物語　・ある永遠への序章　・佐々木一族　・子母沢寛—勝海舟　・周五郎—ながい坂　・遼太郎—国盗り物語　・信仰というもの　・我慢しなさい　・渡辺照宏—死後の世界　・乱歩—黄金仮面　・成智—ある捜査官の記録完全犯罪　・島田—科学捜査官　・斎藤栄—奥の細道殺人事件　・小峰—アルキメデスは手を汚さない

② 歴史・伝記・社会

・中野好夫—アラビアのロレンス　・NHK特派員報告—西ドイツ　・ガダルカナル（太平洋戦争）・泉靖——インカ帝国　・黒沼健—失われた古代大陸　・王貞治伝　・矢野—アインシュタイン伝　・会津の伝説　・会津坂下町の歴史と史話　・鈴木—ナイルに沈む歴史

③ 科学

・野田—新しい生物学　・動物界の神秘　・現代物理（ブルーバックス）・粒子論の世界　・朝日新聞社—地震列島　・坪井—新地震の話　・畑中—宇宙と星　・糸山—太陽への挑戦　・地球空洞説　・亀井—日本に象がいたころ　・遠山—数学入門　・中沢—数学をおもしろくする本　・高橋—日本土木の歴史　・菅井—新しい科学の話　・CQ出版社—ハムになる本　・テープレコーダーのすべて　・はじめてラジオを作る本　・服部—大地の微生物　・都筑—四次元の世界

④ 娯楽・実務・雑

・村田—レタリング入門　・将棋入門　・手紙の作法　・初歩麻雀入門　・女を笑わす法（ピンクジョーク）・五木勉（7）—ノストラダムスの大予言者　・高校生の科学的勉強法　・多湖—頭の体操　・小田—心霊の発見四次元の不思議　・推理ゲーム（ガッパノベル）

(2) 外国

① 文学・思想

・スチブンソー——宝島　・ディケンズ—クリスマスキャロル　・ヘミングウェイ（4）—武器よさらば，誰がために鐘は鳴る，老人と海，日はまた昇る　・ブロンテ—ジェーンエア，嵐が丘　・カポーティ—ティファニーで朝食を　・ウィリアムズ—欲望という名の電車　・ドルトントラボ—ジョニーは戦場へ行った　・ペンドルトン—マフィアへの挑戦　・ハイネ—ハイネ詩集　・レマルク—西部戦線異状なし　・ヘッセ—青春は美し，車輪の下　・ヒルティ—幸福論　・ルソー—孤独な散歩者の夢想・キエルケゴオル—愛について・モンテクリスト伯　・マルロ——人間の条件・ウィーダ—フランダースの犬　・テクジュペリ—星の王子さま・トーベ・ヤンソン—ムーミン谷の冬　・マリコ—静かに自習せよ　・トルストイ—われら何をなすべきか，人生論　・ドストエフスキ——罪と罰　・トマスアケンピス—キリストにならいて　・バルフインチ—ギリシャローマ神話　・アンデルセングリム童話　・蘭の肉体　・バラード—時の声　・水滸伝　・偉大なる王

② 歴史・科学・解説

・ルネグルッセ—ジンギス汗　・ウェルズ—世界戦争
・マックスホーン—アインシュタインの相対性理論
・サトリック—ソビエート科学史（物理編）　・イスマヴィスコ—神秘術とは何か　・エドワード—二十世紀のなぞ　・パトリックリード—コルディシ大脱走
・ロバートソン—荒海からの生還

③　推理小説・ＳＦ
・ジュールベルヌ—必死の逃亡者　・コナンドイル—シャーロックホームズの冒険，ドイル傑作集，シャーロックホームズの生還　・エラリクィーン—エラリクィーンの事件簿，Ｚの悲劇　・スミス—銀河パトロール隊，ヴァレロンのスカイラーク，スカイラーク３号
・ヴァンダィン—グレイシーアレン殺人事件，ウィンター殺人事件　・ヒルトン—学校の殺人　・フォーサイス—ジャカルの日　・クロフツ—ポンス殺人事件
・フレミング—００７カジノロワイヤル　・ピェールブール—猿の惑星　・マクオブーゾ—ゴッドファーザー　・ヴォークト—宇宙船ビーグル号の冒険　・ホジスン—異次元を覗う家　・海から来た魔物　・リュティン太陽

(3)　冬休中，一冊も読まなかった者，合計 156中17名（機械—２，電気—８，化学—６，土木—１）

まとめてみると，部門としては，
日本文学史・評論等— 150　　国文学，評論等—42
科学—19　　娯楽—15　　推理・ＳＦ—21
個人別では，
遠藤周作—17　　夏目漱石—12　　星新—11
が著しく，最も回数多く読まれたのは，珍妙にも
五木寛の「ノストルダムスの大予言者」とぼ。

4．ま　と　め
以上の実績について，その原因を考え，さらに実態を分析し，何がしかの判断を下すことは，容易のようであって，しかも見当はずれを来たしやすいおそれもあるが，正月休みという，心がゆるみ，気が散り勝ちな期間であった，という特殊条件を考えに入れながら，一年生の「書物」というものへの対応が，わりあい身がまえなしに露呈したと見なして，私なりの感想をつけ加えてみよう。

(1)日本文学の，特に明治大正文学の本格的なものを先ず読ませたい。
(2)外国文学については，読書案内から出発させなくてはならない段階にある。
(3)努力して読み通すような長編ものに食いつく意欲を燃やす志がないのだろうか。
(4)根本的に，読書の意義や，すぐれたどっしりした本を読む深い喜びを自覚させて，暇をつぶしや気休めなどのためと，人生に感動することを学ぶためとの，全く次元の異なる読書の，時，処，人に適した使い分けができるようにしてやりたい。専門書以外にはきわ物（世の人はベストセラーと呼ぶ）を追い，笑いころげるだけの読書しか知らない，学生時代は，哀れではないか。
(5)君たち今の一年生は，技術畑という特殊な狭い世界へ突き進んでゆくべき境遇にあるがゆえに，さらに，困難を増す日本の社会に生きてゆかなければならないめぐり合わせを持つからこそ，古今のすぐれた，一般教養面の名著に，この二，三年間のうちに時間を惜しんで読みふけり，感動する経験を，ぜひとも味わせてやりたい。

ささやかな国語科の教師の持つ，根強い願いである
（49・２・16）

都市人の疎外と都市計画

—疎外の克服策としての〝住民による都市づくり〟について—

4　土　大　野　　静

〈はじめに〉人間疎外という言葉に象徴されるように，現代社会においては，人間の非人間化という現象が見られる。ことに都市社会においては，この傾向が強いようである。人間疎外の現象は，資本主義社会の構造によって引き起され，また，産業化，大衆社会化，都市化，および官僚化などの社会状況的要因によって促進されている。

従って，都市における人間疎外の状況を明らかにし，それに対する，都市計画による施策を追求することは意義あることと思う。しかし，人間疎外の克服という大問題についての具体的な都市計画上の方策を述べることは，現在のわたしの力では，非常に困難なことである。また，都市人の人間疎外的状況の把握や，その克服について考えるためには，社会学的なアプローチが必要となる。

ここでは，まず人間疎外の状況を把握した上で，都市計画的立場で，その克服の手がかりをつかんでみたいと思う。

〈人間疎外の概念〉疎外という言葉は，自己にとってよそよそしい，別なものになる，ならせられるということであり，人間疎外とは，簡単にいえば，人間が

非人間化することである。近代以降に，強く見られるようになってきた人間疎外は，個人が自己の同朋である他の人々や，一般にまた自己の周囲の世界に対して非常によそよそしい関係しかもちえなくなってゆく傾向として現われている。そのために，個人は深い孤独の中に生きており，多くの人々は，自分の従事している職業上の仕事において，自分の人格的な欲求の充足を見出すことができず，自我喪失の状態に陥っているのである。この点において，今日，多くの企業が週休二日制を実施し，人々が労働を離れた余暇，レジャーの中で自分を取りもどそうとする傾向が支配的であることも理解できる。

さて，この人間疎外という現象は，二つの局面としてとらえられる。ひとつには人間の他の人々からの疎外であり，これはまた，社会の中にあって分業化，機械化によって深められてゆく人間性喪失の事態である。さらにつけくわえれば，技術革新，大衆社会化状況，組織の官僚化によって促進される，人間の歯車化，利己的アトム化の状況であり，今日，この局面はいわゆる大衆社会的疎外として主に，人間の意識的，行動的主体性の喪失の事態，すなわち，非人間化の事態として捉えられている。

第二の局面は，資本家の労働力収奪過程から引き起され，資本の独占化によって深められてゆく人間の商品化の事態，すなわち，人間の自己疎外である。今日では，労働は単に生計をたてる手段となってしまい，人間が主体的に労働の全過程に参加することなく，従って仕事における創造の喜びは湧かない。人間の労働は，まさに商品と化してしまっているのである。

〈都市人の人間疎外〉 以上で人間疎外の概念，一般的状況を述べたわけである。今度は都市社会において，それがどういう現実として現われてきているかということについて述べよう。現在における東京，名古屋，大阪などの巨大都市圏は，集積の利益の原理によって膨張してきた。そして過密の弊害を生み出し，今日ではそれらが一定の限界を越え，さまざまな，都市における人間疎外的状況を引き起こしている。

このうちの第一は，物理的な人間疎外である。スモッグ，騒音，河海汚染，地盤沈下，交通麻痺，通勤地獄などの公害は産業化，都市化という社会状況的要因ばかりでなく，大企業優先，経済成長重点主義の矛盾の現れでもある。また，それらを許してきた市民や労働者および組合側などにも原因があるのは否めない。第二は，社会的な人間疎外である。人種的，身分的差別，経済的，職業的落差，道徳的，法律的逸脱，臨時的，日雇労働などを素因として発生した人間疎外は，都市において，それぞれ朝鮮人地区スラム，老朽，バラックスラム，バタヤ街，無法地帯，ドヤ街などを発生させ，その拡大化を促進している。また，人間疎外によるパーソナリティの解体は，大都市において犯罪，非行，暴力，売春などの大量発生を促進している。

都市人の人間疎外を引き起すものは，資本主義的構造要因であり，また，都市化に伴う都市的環境の影響要因である。そして，現実的にこれらの二要因が複雑に関連し合って，大都市化の進行につれて，都市人の人間疎外を深刻化し，拡大化しつつあるのである。

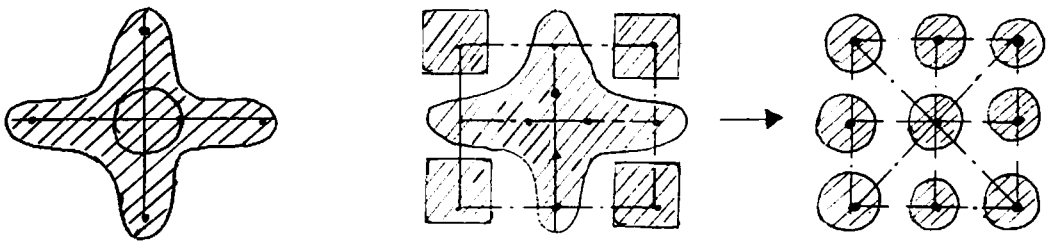
〈人間疎外の克服〉 人間疎外の概念を規定したことからも明らかなように，人間の自己自身からの疎外も，人間の他の人々からの疎外も，ある現象の二局面として引き起こされているわけであるから，克服について考察するためには，次のことをふまえることが必要である。それは，疎外の根本的な解決のためには，思想上だけでなく，実践的行動を通じて個人が，他の人々の立場，状況に関与することが大切であるということ，また，決してイデオロギー的論議に終始せずに，将来の社会，すなわちそこでは個人が，自分の住む共同体の一部となっているような社会のために，自分の努力を仲間と結びあわせることが大切であるということである。結局，そうすることで，疎外の二側面が切り離されずに，換言すれば，根本的に解決されるのである。

〈都市計画と疎外の克服〉 さて，上述した疎外克服の原理ともいえることに沿って，都市計画的な立場から，疎外の克服について考える段階に到達した。

いま，都市人の人間疎外における，物理的側面のなかの交通麻痺や通勤地獄を取り上げて考えてみよう。交通問題に対して，電算機を導入し，交通ネット・ワークシステムを高度に合理化することも，現代のスプロール化しきった都市にとっては，ひとつの解決手段となるであろう。しかし，これは決して根本的解決策ではなく，また経済成長本位の立場から，住民にとってマイナスの効果を招く恐れもある。

端的にいえば，資本の都心部への過度集中が，職住分離をもたらし，必要以上の交通を生ぜしめ，また，居住地の不均等発展を招く主因なのである。従って，まず都心部への事業所立地を規制し，これを郊外へ拠点的に分散立地させることが必要であり，また，都心起点の放射型公共交通体系を変革し，環状方向の幹線交通を発展させることが重要である。ここで，これまでの一点集中型の都市圏構造から，新たに多核都市圏へと移行することが大きい意義をもつのである。

①（基本単位方式）この多核都市圏化は基本単位方式ともいえるが，これは如何なるものであるか，この方式では，各単位となる都市の最適人口規模の上限を定め，そこに住む人々の通勤，通学はその都市内で完結させ，いわゆる職住一体をはかるのである。従って，東京，名古屋，大阪などのような市街地の連帯した巨大都市は存在させず，巨大都市は上記の都市を基本単位とした，連立多核都市群としての大都市圏があるだけである。また，基本単位としての各都市は，それぞれ自治都市として，相互の長所を緊密に補完し合うよ



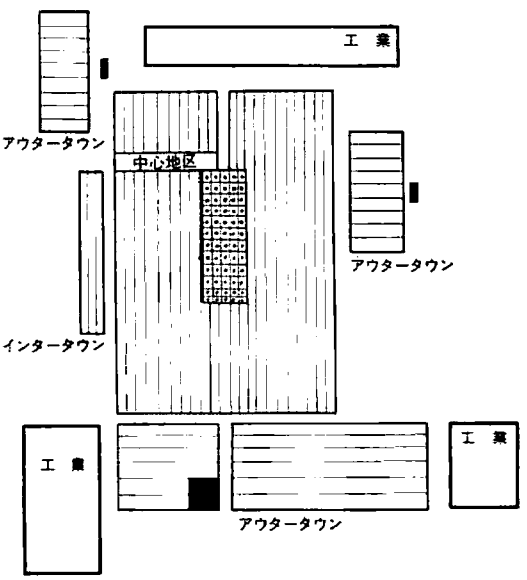
図（1）一点集中型都市圏から多核都市圏への移行

うな，都市の民主的連合体を建設するようになる。また，各々の都市は緑地を以って区画され，高速大量交通によって結合されるようになる。

すでに過大都市となっている東京を考えると，現実的にこの基本単位方式を適当してゆくことは，非常に困難である。しかし，次に述べる二点により，基本単位方式の採用，連立多核都市圏化ということの可能性が見出されるであろう。(図(1)参照)　ひとつに，現在ヒトデ型に形成されている既成市街地部分の谷間に，新たな市街地が及んでゆくとともに，その地域の交通サービスを高めるための手段として，既存の交通ネットワークに連結する環状方向の交通流を考えざるを得ない点である。鉄道，自動車ともに，この方向の交通整備を積極的に推進することによって，放射型の都市圏構造を変革するきっかけとなるのである。つぎに，将来の基本単位となるところの，今日の衛星都市の多くは，歴史的に形成されてきた地域文化の拠点であったことに注目し，ここを新たな生活，文化の核として甦らすことである。今後の開発は，これらのオールドタウンを蘇生させることをねらいとし，事業所立地を誘導しつつ，職住一体のバランスある都市づくりを推進してゆくということである。

(2)（フックの例）さて，基本単位方式の一般論は述べたこととして，次にイギリスのニュータウンとして計画された（が，実際に新都市として建設されるまでに至らなかった）フックを例にとって，職住一体，あるいは自己完結型の都市の具体的イメージを追求してみよう。尚，ここで言及しておくべきことは，フックが人口10万の都市であり，先に述べた基本単位方式や連立多核都市圏の提唱者たちの中には，都市の最適規模上限を25万人にする学者もいれば，30万人説をとる学者もいる。わたしはまだ読んでいないが，ビクター・グルーエンはその著書『都市の危機』のなかで，25万人説の科学的根拠を明らかにしているそうであるから，興味ある人には一読することをすすめる。しかし，日本における人口25万程度のニュータウンを見ても，ベッドタウン的性格が強く，世界的にも，人口25～30万程度の自己完結型都市は見当らないので，あえてフックをここでとりあげるのである。

では，フックにおける「都市らしさ」を論じながら，交通麻痺や通勤地獄などの「都市人の人間疎外」を克服するための一手段として，職住一体のイメージを明確化してみよう。（図(2)参照）



図（2－1）　フックの市街地(平面配置図)

フックの市街地全体は，幅 3.6キロメートル，長さ 6.4キロメートルの広さを有している。都心部は中心地区と呼ばれ，幅 0.4キロメートル，長さ 1.2キロメートルの線状地区であり，250人/ha の人口密度を有している。この中心地区は，都市の中核であり，歩行者専用の商店街が連続的に配置されており，それ自体で遊歩道を形成している。他に，公共施設や広場・アパート群が組み合され，全体の有機的統一がはかられている。また，この地区は二重構造となっており，上部デッキは道路と駐車場を覆うフタを形成している。

中心地区の両側に 800メートル程ずつの幅を有して

いる地区がインナータウンである。ここは，中心地区と同様に高層地区であり，人口密度は 180 人/ha と高い。インナータウン自体の面積を小さくしているため，公共オープンスペースや中学校などは，インナータウンの周辺部に配置しても，徒歩で充分であり，そのため，より多くの住民を中心地区及び，その周辺部の商店街の近くに居住させることができる。

また，インナータウンの外側には，人口密度 100人/ha 商店，社会施設などの副中心地区を有するアウターターウンを建設する。

いわゆる，都市における「緑」についていえば，公共オープンスペース，競技場（たとえば，いわき市の上荒川運動公園のようなものと同じと考えてよい），新造成湖などの開発と同時に，都市緑地帯として景観の保存をはかっている。フックの「都市らしい」部分というのは，インナータウンであり，幅わずか2キロメートル程の線状市街地であるが，この周辺に主要なオープンスペースを配する形をとるので，ニュータウン全体のなかに，緑地帯が形成され，がっちりと建てこまれた固い感じの部分と，湖・森・遊び場などのやわらかい感じの部分との美しいコントラストが，田園のなかの都市という雰囲気を出している。また，ここにイギリス人の，都市像についての伝統的な考え方が表現されているのに気づく。

結局，フックにおいては，住居地区は，都市外周部から中心地区に向かって，居住密度，建物高さ，建築密度などが逐次高まってゆく同心円的地帯であり，このように総合体としての都市的景観を高めている。これが，フックの「都市らしさ」でもある。

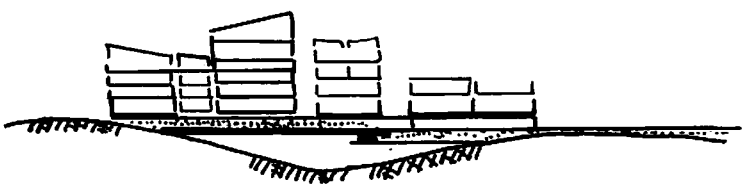
工業地区は，都市周辺部に三つに分散して配置され，工業の過度集中の防止や、通勤時の交通混乱の解消をはかっている。また，中心地区・インナータウンの人口密度を，住居の高層化によって高め，必要住居地区面積をできるだけ減小させ，住居と職場との分離によって生じる交通量を最少限に抑制している。

また，注目されている歩道と車道との分離については，これをほとんど平面的に処理しているが，都市の中核であり，人間，自動車，バス，鉄道などのすべてをひきつける機能を果すことが必要であるために，中心地区に限っては，歩車道を立体的に分離している。さらに，歩道と車道の平面上の交差を避けるだけでなく，できるだけ人間が歩きたくなるような計画，また，できるだけマイカー利用者が少なくなるように道路を設計している。

〈住民による都市づくり運動〉以上において，基本単位方式によって交通麻痺や通勤地獄などの人間疎外的状況を解決する一例を示したわけである。その他さまざまな人間疎外に対しても，都市計画上の，種々の解決手段が見出されるであろうが，忘れてはならないのが，都市住民が積極的に人間疎外克服の政策に関与してゆくことである。（ここで，「政策」と表現したのは，都市計画というものが，住みよい都市づくりのための，都市建設，都市改造，都市管理などに関する政策の大系であり，総体であるからである。）また，人間疎外の克服の原理は，住民参加による都市づくりによってこそ実践されてゆくのである。では，最初に具体的な住民運動の例を見てみよう。

①（藤沢市辻堂の場合）神奈川県藤沢市，東海道線辻堂駅の南側，ここは古くは湘南の別荘地の一つであった。戦後は，東京通勤者の住宅地に変わってきている。むろん道路は計画されたものではなく，他からの訪問者にとっては迷路同然であり，非舗装，下水のない道路は，雨が降ればぬかるみとなり，また，消防自動車が入れないところが多いなど，環境上の問題を多くかかえていた。そこで，藤沢市当局はこの地域に区画整理を実施して，環境の改善を計画したわけである。

ところが，住民は当初，区画整理のために強いられる「減歩」つまり自分の土地の一部を道路をはじめ，公共スペースのために無償で供出することや，天下りの計画であることなどに対して反発していた。しかし，熱心なリーダーが反対の署名を集め，集会を重ねる過程で，単なる不満を述べる段階から，計画のあり方，



図（2—2）　フックの中心地区における二重構造

丘陵と丘陵の谷の部分は，駐車場，車道，鉄道のためのスペースであり，その底部を覆うように市街地が形成される。

地域の生活環境というもののあり方などについて思索するという段階まで発展していった。

市の都市計画が、広い道路を碁盤目状に配置することを目指していたのに対し、通過交通を増加させるのは本当に地域のためになるのか、むしろ交通事故や騒音その他の公害の発生源になるのではないか、またそのために、残された緑が減少するのは環境の悪化ではないのか、といった、まさに都市ないし住宅の理念にまで、住民は迫ってゆくことになる。

運動の経過をかいつまんで述べれば、昭和42年の春に「辻堂内部の環境を守る会」が結成され、住民大多数の参加を得て、反対署名や陳情、測量に対する抵抗などの活動を行ない、翌年の秋には市当局に計画を白紙撤回させることとなった。以後は、住民意志にもとづく町づくりを求めて、ねばり強い活動がつづけられているようである。

②（住民による都市づくりの論理と展開）辻堂の場合にもみられるように、一般に、行政として執行されている都市計画が、実情を無視しているところから、市民の反発が生まれる。そして、都市の実情についていちばんよく知っている住民から、苦情の提出、陳情という形で要求の提出がなされるわけである。住民による都市づくりを展開してゆくには、その根幹に、住民が主人公であるという思想と姿勢と方法がしっかりと据えておかれねばならない。そして、その姿勢は生活環境に対する苦情、切実な問題を軸としつつ、一体どうなっているのかという点検を、住民のために、住民みずから行なうというセルフ・サーベイ（自己点検）に現われねばならない。これが第二段階としての、実情の調査である。

調査結果は取りまとめられ、分析されて、問題点の整理および、住民による都市計画の基本課題の選定の段階へと発展するのである。ここでは、住民自身の勉強も大切であるが、専門家の協力がぜひとも必要である。住民のセルフ・サーベイによって得られた情報は、再び専門家の協力により、一定の政策として組み上げられるべきであり、その結果を広く住民に知らせるために、白書運動なるものが重要となってくる。また、白書運動は、都市政策を住民のものとするためにも欠せないのである。

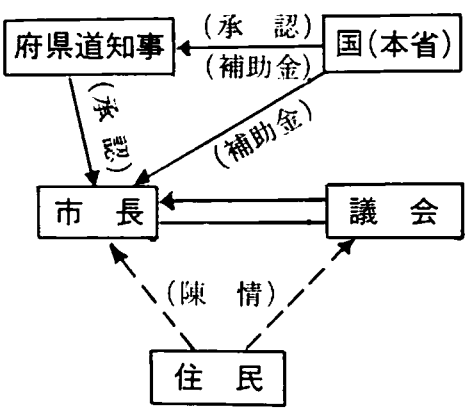
白書運動と並んで重要であり、具体的な都市づくりのなかで出てくる問題に対して有効にチェックし、その修正・撤回を求める上で、きわめて決定的な役割を果すのが代替案の提示である。このことは、現行の都市計画に反対するだけの段階から、代替案の提示へと発展することであり、きわめて建設的である。また、代替案の提示は、市民が都市計画の主人公であることのために取得すべき資格であるとも言える。

以上で、苦情の提出から代替案の提示までの展開と論理について、一応言及してきたわけである。ここにおいて、住民による都市づくり運動は急速に組織性、技術性を要求しはじめ、ひとつの転換点に到達した。つまり、市民の都市計画体制の確立へと発展してきたのである。

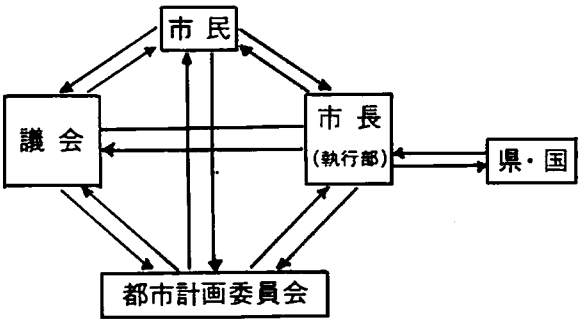
③（市民の都市計画体制）この体制を確立するにあたって、解決すべき課題が沢山ある。以下に、これらの課題を記述してみる。(1)市民と都市計画の関係をどうするのか。(2)いかにして、都市計画の自治性、独立性を確保するのか。換言すれば、政治権力、政治的圧力と都市計画との関係をどうするのか。(3)いかにして優秀な計画樹立を可能にするのか。(4)議会や市長（執行部）などの機構との関係をどうするのか。(5)住民相互のエゴの対立をどうするのか。(6)財政の問題はどうするのか。(7)計画の科学性をいかに確保するか。(8)いかにして実現にうつしてゆくのか。等々、他にも多数のポイントがあるだろうが、ここでは、これらのポイントに対して都市計画委員会というものを案出して、これで以って解決できるポイントについてだけ答えていこうと思う。

都市計画委員会の各委員は市民のなかから選ばれるわけであるが、この委員会は計画に関する仕事のうちから〝執行過程そのもの〟を除いた残りのすべてを専一に取扱う機構である。従って、ここでは都市計画に関する実質的な決定や、住民の意向の受けつけ、苦情の受けつけ、および、その処理の方法の裁定や指示をすることになる。つまり、上述した第五のポイントである住民相互のエゴの対立などが生じた場合は、この都市計画委員会に委ねられるわけである。また、市民と都市計画の関係というものを、住民の、都市計画の諸決定に対する関与の形体、住民の具体的な意向の、都市計画への反映のしかた、住民の都市計画に対する苦情の取扱われ方といった三つの段階にわけて考えた場合、市民と都市計画の関係は、都市計画委員会の機能によって明確化されてゆくであろう。

また、都市計画の自治性、独立性について配慮することは、政治権力・政治的圧力と都市計画との関係に



図（3－1）都市計画と住民の位置（従来）



図（3－2）都市計画委員会の位置(案)

ついて考えることでもある。具体的には，市民の都市計画体制と議会や市長（執行部）との関係であるが，結局，都市計画の自治性，独立性を保持するためには，都市計画委員会およびそれが管轄する一切は，議会からも市長（執行部）からも独立していればよいのである。なお，市民，都市計画委員会，既存の行政機構との関係を示した図(3)を参照してほしい。

さて，市民の都市計画体制については，その実現についての見通しを述べてから，終えることにしよう。この体制の根幹は，都市計画と住民との望ましい関係の樹立であり，現体制の民主化である。そのようなことからしても，そして現実の動きからしても，その実現が先ほどの藤沢市辻堂のような住民による都市づくり運動を通じて準備されるであろうことは，たしかなように思われる。

〈さいごに〉主として都市的環境の影響要因による人間疎外を問題として取上げ，住民による都市づくり，換言すれば都市行政への市民参加を以って，人間疎外の克服のための基本的方向を定める結論に達したのである。さらにつけ加えて言うならば，今日の官僚化とともに大きくなってきた政治機構は，人々を単なる対象として扱っているため，都市社会ばかりではないが，人々は政治から疎外されているように感じるわけである。これを克服するにも，やはり都市行政への市民参加のように，積極的に一人一人が政治に関与してゆくことが必要であるといえる。

わたしは，前に述べた克服の原理（この原理を提唱しているのはアメリカの社会学者バッペンハイムである）にそって結論へ達したわけである。しかし，まだまだ検討すべき点が多く残っている。過去においても，疎外を克服すべく，住民が地方自治に積極的に参画すべきであると主張されてきた。それでも疎外克服の成功をおさめるには至らなかったのである。その理由として，近代文化の中に働いている様々な影響が知識に対する新しい態度の発生を妨げる効果をもっているという事実を無視していたことがあげられる。つまり人々の意識，生活態度と克服への実践的意欲との間には，スローガンだけでは解決できないズレが存在しているのである。たとえば社会構造のなかに封建的遺産が残っていると，それによって培われた習俗は容易に清算できない。いわゆる被治者の性格から脱却して，主体的人間としての自覚を持つことが困難なのである。

ところが，現代の住民による都市づくり，あるいは都市行政への市民参加と，過去において注目された地方自治への市民の積極的な関与との間には，時代の変遷や都市化によってもたらされた差異がある。それは一言でいえば，都市化に伴う住民意識の変化である。ここに言う，住民意識の変化の中には，疎外克服のためのプラス面と，また，その逆に，すでに疎外されている人々にみられる孤立化，政治的無関心，エゴイズムというマイナス面もある。しかし，辻堂の住民運動の場合にも見られるように，実践指導者の自然発生により，克服のためのプラス面が活かされ，少なくとも現代人は過去の市民のように封建的遺産に束縛されることは，ないであろう。この点で，現在の住民による都市づくりの成果には期待がもてるのである。

住民による都市づくりの展開，市民の都市計画体制の確立は，新しい形の民主主義政治回復の運動であり，また，人間性回復の運動であるといえる。

新着図書目録

図書館のみ所有する図書を分類別受入順に記載

総　記

日本の図書館　1971　日本図書館協会
朝日新聞縮刷版　48－10　朝日新聞社
東洋文庫242　唐調往来　平凡社
243　説経節　同

哲　学

現代思想4　経済学の認識　ダイヤモンド社
5　テクノクラシー　同
諸橋轍次
中国古典　名言事典　講談社
日本人の宗教Ⅳ
近代日本宗教史資料　役成出版社

歴　史

岩村忍　人類文化史 3
　西アジアとインドの文明　講談社
総合講座
　日本の社会文化史 3　同
　朝日新聞に見る日本の歩み
　（昭和24年～25年）　朝日新聞社
山口宗之　人物叢書169
　真木和泉　吉川弘文館

社会科学

日本の民話
　2　自然の精霊　角川書店
　4　民衆の英雄　同
　5　長者への夢　同
　6　土着の信仰　同
　7　妖怪と人間　同
　8　乱世に生きる　同
　10　残酷の悲劇　同
定本　柳田国男集　第1巻　筑摩書房
　同　第4巻　同
　同　別巻2　同

自然科学

田中・前田
　計算機のための行列算法の基礎
　サイエンス社
清水留三郎
　電算機による行列算法の応用　同
渋谷　政昭
　計算機による大型行列の反復解法　同
藤川洋一郎
　電算機による偏微分方程式の解法　同
清水・小林
　計算機による常微分方程式の解法 I II
　サイエンス社
三浦・田尾
　計算機のための数値計算法概論　同
井口靖弘
　多変量解析とコンピュータプログラム
　日刊工業新聞社
藤岡由夫　レーザーと光
　1　光と像　共立出版
　2　光と生体　同
　3　見えない光　同
　4　レーザーI　同
　5　レーザーII　同
小出昭一郎
　メシア量子力学 1・2・3　東京図書
井上健男
　相対論的量子力学 1・2・3　同
豊田博慈
　1　力と相互作用　同
　2　エネルギーと運動　同
　別冊　新しい物理　同
金光不二夫　科学普及新書
　おもしろい宗教論　同
小平・谷川　科学普及新書
　現代の天体物理学　東京図書
渡辺哲夫　科学普及新書
　太陽系の運命　同
関口直甫
　人工衛星の観測法　恒星社
渡辺敏夫
　こよみと天文　同
野尻抱影
　星の神話伝説集成　同
伊藤勝三・中原凱丈
　現代健康の科学　文化書房博文社
浜内清　一般天文学　恒星社
宮本正太郎
　概論天文学　地人書館
渡辺敏夫
　数理天文学　恒星社厚生閣
宮本正太郎
　宇宙科学入門　朝倉書店
宮地政司
　宇宙の探究　岩波書店
岩波講座　現代物理学の基礎
　物性 I　同
今関六也・本郷次雄
　原色日本蘚類図鑑　保育社
　　同　　同
瀬川宗吉
　原色日本海藻図鑑　同
岡本省吾
　原色日本樹木図鑑　同
塚本洋太郎
　原色園芸植物図鑑（II～V）　同
野上茂吉郎　基礎物理学選書
　13　原子核　裳華房
押田勇雄　基礎物理学選書
　14　物理数学　同
小野実　目で見る天文ブックス
　太陽をとらえる　地人書館
広瀬秀雄
　目で見る天文ブックス
　彗星を追う　同
長沢工　目で見る天文ブックス
　流星にむかう　同
竹内均　コスモス・ブックス
　地球　法人大学出版局
小林茂明
　重さのない世界　総合科学出版
小尾信弥　世界大学選書
　宇宙の構造　平凡社
文部省大学学術局学術課
　研究所要覧　日本学術振興会
The Heath Science Series Book　1～6

工　学

小坪清真
　土木振動学　森北出版
川崎逸一・岩松幸雄
　土圧を受ける構造物設計の要点と計算例
　鹿島出版会
パワー社出版部
　製図記号(4)　電気編　パワー社
宮入庄太
　エネルギー変換工学入門(下)　丸善
J.F.Abel
　Introducton to the Finite Element Method　Van Nostrand R-inkordco

産　業

八十島義之助
　都市交通講座 1　都市と交通　鹿島出版会
増井健一　同　2　交通と経済　同　同
井上孝　同　3　交通計画と技術　同
岡野行秀　同　4　市民生活と交通　同
井上孝　同　5　交通計画の実際　同

語　学

千葉良雄
　言語学と心理学　明治図書
村山七郎・大林太良
　日本語の起源　弘文堂
高田瑞穂
　わかりやすい現代小説　学燈社
本林勝夫　同　現代短歌　同
川副国基　同　現代評論　同

文　学

吉田精一
　対談・古典の再発見　学燈社
平岡鳴帥
　変容と試行　河出書房新社
竹内好　日本と中国のあいだ　文芸春秋
寺田透　源氏物語一面　東京大学出版会
荒川法勝
　伊藤左千夫の生涯　日貿出版社
宮本百合子
　文学にみる婦人像　新日本出版会
金井直　詩の国への旅　文化出版局
安住敦　俳句への招待　同
八切止夫
　真書太閤記　日本ツエル出版
光明寺三郎
　真実伊勢物語　三崎書房
矢野峰人
　鉄幹・晶子とその時代　弥生書房
小林一郎
　近代作家の精神風土　教育出版センター
桑原武夫
　文学と人間の生き方　講談社
北小路健
　藤村における旅　木耳社
日本文学研究資料叢書
　歴史物語 I　有精堂
奇書シリーズIV
　聊斎志異　上・下　平凡社
日本近代文学大系
　34　寺田寅彦集　角川書店
筑摩世界文学大系
　11　ダンテ　筑摩書房
折口信夫全集15　中央公論社